

本の紹介

尾上哲治著「大量絶滅はなぜ起きるのか 生命を脅かす地球の異変」

講談社ブルーバックス, 254p, 2023 年 9 月 20 日発行
1,000 円（税別）, ISBN978-4-06-533395-2

「先生、地層を調べると、何年前にどんなことがあったってどうして分かるんですか」「大昔海だった場所がなぜ今陸地になっているの」「一番最初の生命はどうやって誕生したのだろう」「恐竜はどうして絶滅してしまったのかな」「通学路でこんな石を見つけたよ、先生、この石なんですか」

「土地のつくりと変化」の単元を進めていると、6 年生の児童たちは様々な問題を見だし、授業や雑談のなかで唐突にそれをぶつけてくることがある。正直に言うと、彼らが納得できるような返答や説明ができて自信はない。それでも、私は質問したくなる気持ちに心から共感できるし、そこに疑問をもったあなたはすばらしいと思う。途方もなく大きな時間と空間のスケールを実感し、地球の過去に思いを馳せたとき、圧倒されるような感覚と知的好奇心の高まりを覚える。きっと子どもも同じなのだろう。

そんな好奇心を刺激するタイトルと著者名を本屋で見つけて心躍り、手に取ったのが本書である。というのも、以前に読んで強く惹かれた『ダイナソー・ブルース 恐竜絶滅の謎と科学者たちの戦い』（閑人堂）の著者である地質学者・尾上哲治氏の本だったからだ。裏表紙を読むと、今回の話題の中心は三畳紀末の大量絶滅。私は、地球史において 5 回の大量絶滅「ビッグファイブ」があったことは知っていたものの、白亜紀末、ペルム紀末といった地質時代の大きな境界以外は、ほとんど気に留めたことがなかった。当然、三畳紀末について何の知識もない。そんな私にブルーバックスの本が読めるのか、と通常なら尻込みしてしまうところである。

しかし、目次に目を通しただけで「読みたい！」と思った。第 1 章異変、第 2 章混沌、第 3 章犯人、第 4 章指紋、第 5 章連鎖、第 6 章疑惑…と続く章立てを見ると、一瞬「あれ？フィクションではないよね」と戸惑

う。だが、その意外性がむしろ強い吸引力となった。

著者は世界各地の地層を調査する研究者でありながら、目次からも分かるように、推理小説や冒険小説に出てくる主人公のような語り口で、三畳紀末に起こった事件について話を進めていく。今から約 2 億 150 万年前、大量絶滅の引き金を引いた“犯人”は何者なのか。犯人はどのような“犯行の手口”を使ったのか。そして、その証拠はどんな“指紋”として地層に記録されているのか。著者の使う比喻表現は、読者に理解を促し、かつ物語としてのスリルを味わわせてくれる。

また、本書には事件の情報提供をするたくさんの証言者（研究者）が登場する。地層や化石の研究をはじめ、植物、動物、火山、地震、大気、海洋、気候、土壌など様々な分野で明らかにされてきた三畳紀末に関する研究成果が並ぶ。読者は、まるで研究チームの一員になったかのように、それらの断片的に見える情報を著者と一緒に追いかけて、整理し、大量絶滅に至るシナリオを推論する過程を追体験できる。

本書後半では、著者独自の絶滅論が語られる。一方で、自身の仮説の欠点や迷い、さらにはまったく逆の説が存在することも紹介している。ここに現場のリアリティを感じずにはいられない。研究はまさに現在進行形なのだ。本書の刊行から数年がたち、三畳紀末の大量絶滅をめぐる証拠は着実に積み重ねられている。著者が今日もどこかで地層と向き合い、研究を進めている姿が思い浮かぶ。

読了後、私は「研究ってすごいな。私も頑張らなくては」と元気をもらえたような気がした。子どもたちにとって、理科を学ぶことが単なる知識や技能の獲得で終わってしまってはつまらない。自然の事物・現象に対し、「なぜ？」「どうやって？」と問題を見だし、心が動く瞬間は、学びの貴重な第一歩となるはずだ。そこから答えに近づいていく道のりを丁寧にたどる楽しさをこれからも子どもたちと共有していきたい。そう改めて考えさせられた。

（高萩市立秋山小学校 永沢 亜矢子）

2026.01.31 受付

2026.02.03 学会ニュースレーター公開

2026.02.03 学会ホームページ公開